

Title	大学生にみられる超常現象志向に関する基礎研究
Author(s)	太田, 妙子; 吉川, 茂
Citation	大阪外国語大学論集. 18 p.281-p.292
Issue Date	1998-03-30
oaire:version	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/79759">https://hdl.handle.net/11094/79759</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## 大学生にみられる超常現象志向に関する基礎研究

太 田 妙 子  
吉 川 茂

### A Basic Study of Belief in Paranormal Phenomena in Students

Paranormal phenomena are defined as phenomena beyond the range of normal experience or scientific explanation and include clairvoyance, telepathy, precognition, psychokinesis and spiritual phenomena. This paper presents the results of three separate surveys used to examine the types of, and the degree to which college students believed in paranormal phenomena and the relationship of these beliefs to other personality factors. The results are as follows: (1) More than 50% of students believed in psychic powers. (2) Factor analysis revealed two factors in beliefs of paranormal phenomena : (I) overt paranormal phenomena, and (II) covert paranormal phenomena. (3) Affirmation of paranormal phenomena was correlated with NP (Nurturing Parent) and FC (Free Child).

透視、テレパシー、予知などの超感覚的知覚や念力といった超能力、および心霊現象やときにはUFOをも加えた、これまでに認められている科学法則では説明しきれない能力や現象を総称して超常現象という。超常現象に対しては2つの視点から関心がもたれる。

1つは超常現象が事実として実在するか否かという関心である。実在を肯定する、あるいは紹介、報告する例は書籍、雑誌、マスコミ等によって膨大な量にのぼっている。一方、それらを否定、批判する立場や研究も多く、両者の論争が結論に到達するには程遠い状態にとどまっている。ただし、肯定側が超常現象をいくぶん娯楽的、神秘的な側面で捉えているのに対し、否定側はその矛盾やトリックを追及する科学的な態度で臨んでいて、論争はうまくかみ合っていないことが多い。

この研究の目的はいずれかの側の正当性を証明することではなく、もう1つの関心として、超常現象を信じるか信じないかという個人の態度について調べたい。十分に確証が得られていない現象であるだけに、個人的な推測や、感情、特殊体験の有無などの影響が介入しやすく、態度には大きな開きが見られるであろう。

そこでまず第一に、Study Iとしてどのような超常現象がどの程度大学生に信じられている

のかを概観することから始めたい。続いてStudy IIでは、各超常現象への回答を因子分析することにより、大学生がとらえている超常現象の背後にどのような因子が存在するかを検討する。さらにStudy IIIとして、超常現象を信じることの高低と人格特性との関連を調べ、信じやすい大学生のパーソナリティについて考察したい。

## Study I 大学生の超常現象志向の実態

### I. 目的

超常現象に関する多くの内容がどの程度肯定あるいは否定されるのかを調べ、大学生にみられる超常現象志向について考察する。大学新入生を対象にした金児（1995）による宗教的意識・行動についての調査によると、霊魂や来世、死後の世界、虫のしらせ、お守り・お札の力といった項目が平均20%から40%という高い割合で信じられている。またUFOや超能力の実在についてはやはり40%を越す肯定率のあることが紹介されている。（菊池、1997）この研究では超常現象の内容をこれらを含め、精神的・作用全般および未確認事象として、科学的に満足の確証の得られていない項目に対する大学生の反応を調べる。論理的思考力の訓練を一つの目標とした教育を受けてきた彼らが、論理的に不明瞭で解明しがたい事象に遭遇したときにどのような態度をとるのか注目される。

### II. 方法

対象は大阪府下の四年制国立大学の学生207名である。年齢は18歳から27歳にわたっており、18-20歳が178名と全体の86%を占める。性別は男子64名、女子139名、記入もれが4名であった。体育の授業時間中に回答を求め、回収した。

超常現象に関する項目は、超能力や心霊に関するもの、日常的場面における精神的・作用に関するもの、その他未知生物に関するものなど、信じられやすさの程度を予想しつつ、そのレンジが大きくなるよう考慮して34項目を作成した。実際の質問紙の呈示順序のとおり項目内容をTable 1に示す。教示は「つぎの文章を読んで、あなたの感じ、考えに近いものを選んでください。感じ、考えは人によりさまざまに異なっているので、決まった正解というものはありません。自分の率直な感覚で教えてください。」とし、選択肢はY（肯定）、?（疑問、どちらともいえない）、N（否定）の3件法として、回答を求めた。

Table 1 超常現象に関連した記述に対する大学生の回答

項目	YES	?	NO	容認スコア
1 私の予想や予感がよく当たるほうだ。	38.6	10.6	50.8	0.870
2 私には他人にない変わった潜在能力があるように思う。	22.2	8.2	69.6	0.527
3 ストレスの多い現代人にとって信仰心を持つことは大切なことだ。	14.0	14.5	71.5	0.425
4 競り合った試合で勝つか負けるかは最後は精神力にかかっている。	83.5	2.9	13.6	1.699
5 熱烈な愛の想いは遠く離れていようと相手にも伝わる。	38.3	9.7	52.0	0.860
6 超能力といわれるものの大半はトリックだが、なかには本物の超能力もある。	63.3	9.2	27.5	1.357
7 宗教的な体験や現象は、物理学や医学、心理学で解明しようとしても無理である。	53.1	9.2	37.7	1.155
8 現実の心霊写真によって霊の実在は証明されている。	24.6	16.9	58.5	0.662
9 サイコロのある目が出るように精神集中して投げるとその目が出やすくなる。	18.8	10.1	71.1	0.478
10 深海や密林の奥深くには未知の生物がきっと生息している。	87.4	2.4	10.2	1.772
11 世の中には単なる偶然では片づけられない一致する出来事がよく起きている。	84.1	4.3	11.6	1.725
12 「スプーン曲げ」は人間の本来もっている潜在能力が実際に表れたものである。	20.3	15.5	64.2	0.560
13 私は自分でもよくわからない神秘的な体験をしたことがある。	25.1	4.8	70.1	0.551
14 まだ確認されていないが、ネス湖にはネッシーが潜んでいるはずだ。	25.6	10.6	63.8	0.618
15 人間は死の脅威に直面したときには、通常の何倍もの力を発揮することがある。	83.9	4.9	11.2	1.720
16 空飛ぶ円盤は多数の目撃者や映像が示すように実在している。	58.0	14.0	28.0	1.300
17 睡眠中の夢にはその人の将来の運命が暗示されていることが多い。	39.3	15.0	45.7	0.937
18 世の中には科学や常識だけでは説明できないこともあるものだ。	88.9	4.3	6.8	1.821
19 人は死んでからも、その魂だけは質量のないエネルギーとして残される。	26.6	15.9	57.5	0.691
20 世界の何十億という人のなかには、透視術を使える人間が1人や2人ぐらいいても不思議なことではない。	64.1	8.7	27.2	1.369
21 特殊な才能・体質・精神力をもつ人物のなかには、厳格な訓練や修行を実践した後、空中浮遊を行えるようになる者もまれに出現することがある。	17.4	11.6	71.0	0.464
22 原始生活を続けている民族のなかには、身体内部の病気をその皮膚の上から手を触れるだけで治せる者もいる。	36.2	17.4	46.4	0.899
23 ある家庭にばかり不幸が重なるときには、先祖の霊が関係していないか調べてもらったほうがよい。	34.3	11.6	54.1	0.802
24 人々の真剣な祈りは天候などの自然現象に対しても影響を与えることができる。	22.7	11.1	66.2	0.565
25 宇宙の法則はたとえ目に見えなくとも、つねに万物に働いている。	81.5	10.2	8.3	1.733
26 予言者によって、未来の重大な出来事が言い当てられたことが何度かある。	45.1	9.2	45.7	0.995
27 心霊現象は今のところはまだ科学的に解明できていないが実際にある現象である。	60.7	13.6	25.7	1.350
28 不治の病や末期状態であると宣告されても、奇跡的に助かることがある。	83.6	5.8	10.6	1.730
29 一般の科学や道徳に束縛されないことが、宗教のもつ長所・魅力の一つである。	37.4	14.3	48.3	0.892
30 現代の物質・合理性を中心とした価値観以外にも、精神・非合理性に基づいた価値観を信じる人がいてもよい。	84.9	6.3	8.8	1.760
31 私は占いによって自分の運勢や行動指針を得ることがある。	33.8	8.7	57.5	0.763
32 血液型による性格判断は、一部誤解されている面もあるが、本質的には十分信頼のおけるものである。	33.5	14.6	51.9	0.816
33 タイム・マシンは決して空想の産物ではなく、遠くない将来にはきっと完成される。	30.0	11.1	58.9	0.710
34 人には感知できない異次元空間は実在する。	68.6	8.7	22.7	1.459

N=207 (YES, ?, NOの数値は回答者数の%)

順位	項目番号	項目内容	0(NO)	1.0(?)	2.0(YES)
1	(18)	科学や常識で説明不可	*****		
2	(10)	深海や密林に未知生物	*****		
3	(30)	精神・非合理性価値観	*****		
4	(25)	宇宙の法則は万物に	*****		
5	(28)	病から奇跡的に助かる	*****		
6	(11)	偶然でない一致出来事	*****		
7	(15)	死の脅威に何倍もの力	*****		
8	( 4)	勝負の最後は精神力に	*****		
9	(34)	異次元空間は実在する	*****		
10	(20)	透視術を使える人間	*****		
11	( 6)	本物の超能力もある	*****		
12	(27)	心霊現象は実際にある	*****		
13	(16)	空飛ぶ円盤は実在する	*****		
14	( 7)	宗教的体験は解明無理	*****		
15	(26)	予言者が未来を当てた	*****		
16	(17)	夢に将来の運命が暗示	*****		
17	(22)	皮膚上から病気を治療	*****		
18	(29)	束縛されない宗教	*****		
19	( 1)	私の予想や予感当たる	*****		
20	( 5)	愛の想いは遠く伝わる	*****		
21	(32)	血液型性格判断を信頼	*****		
22	(23)	不幸に先祖の霊が関係	*****		
23	(31)	占いで自分の運勢を	*****		
24	(33)	タイム・マシンは実現	*****		
25	(19)	死後残る魂エネルギー	*****		
26	( 8)	霊の実在は証明された	*****		
27	(14)	ネス湖にネッシー潜む	*****		
28	(24)	祈りは天候にも影響	*****		
29	(12)	「スプーン曲げ」能力	*****		
30	(13)	私の神秘的な体験	*****		
31	( 2)	私には潜在能力がある	*****		
32	( 9)	サイコロに精神集中	*****		
33	(21)	空中浮遊を行える者	*****		
34	( 3)	現代人の信仰心大切	*****		

Figure 1 超常現象に関連した項目の容認率

### III. 結果および考察

Table 1に項目ごとの肯定、疑問、否定への回答の割合を示す。数値はパーセントであり、欠損値のあった項目はそれを減じたうえでの割合を算出してある。80%を越える肯定率は8項目にみられた。「18. 世の中には科学や常識だけでは説明できないこともあるものだ」はもっとも高い88.9%という肯定率に達し、科学による解明が困難とされる超常現象を信じる基盤的意識の根強さがうかがわれる。また、否定率の最高は71.5%の「3. ストレスの多い現代人にとって信仰心を持つことは大切なことだ」にみられ、超常現象を信じる程度に比べては宗教・信仰への関心は希薄であるという結果となった。

項目の信じやすさをランクづけするための1つの方法として、Y（肯定）への回答に2点、?（疑問）には1点、N（否定）には0点を与え、項目ごとに集計、平均したものを容認スコアとした。これは超常現象をどれくらい信じ受け入れているかの指標と成りうるスコアで、完全に肯定されれば2.00点、中間的な回答のときには1.00点、完全に否定されたときには0.00点となる。Table 2には、容認スコアの高い順に項目を並べ替えて、容認スコアをおおまかに図示してある。

いくぶん恣意的な分割となるが、容認率の上位9位あたりまでを1つの群として眺めるとき、大学生の基本的な世界観を見いだすことができる。「科学や常識で説明不可」の容認率1.821から「異次元空間は実在する」の1.459までのこれら項目はたいそうよく認められているため、大多数の大学生が自分を取り巻く世界をどのように認知しているかを表すものと考えられる。つまり大学生にとっては、世界は科学や常識ですべてが説明できるものではなく、目に見えない宇宙の法則に動かされ、未知の生物のみならず異次元空間も存在しており、奇跡的な生還や一致が生じ、人間の精神的作用力は通常の域値を越えることもありうるという感覚、世界観が中心的な位置を占めているのである。科学が発展し、物質的に豊かになり、人間の制御能力が著しく高まった現代にあっても、大学生は精神的には不確実、不安定な世界に生きているといえよう。

こうした感覚、世界観に基づいて、つぎのような超能力や霊を信じる傾向が派生してくるのかもしれない。ランクでは容認率10位の「透視術を使える人間」、11位「本物の超能力もある」、12位「心霊現象は実際にある」、15位「予言者が未来を当てた」、17位「皮膚上から病気を治療」などの項目をつぎの一群とみなすと、大学生の過半数は、超能力や霊魂の実在を信じていることが読み取れる。これら項目の否定率はすべて50%を下回っているのである。

例えば、17位の「原始生活を続けている民族のなかには、身体内部の病気をその皮膚の上から手を触れるだけで治せる者もいる」について、医学や生物学の知識、通常一般の現象とは明らかに矛盾すると思われるが、肯定する者が36.2%いて、疑問回答も合わせると50%を越える。「何年にもわたって、論理的に考えることの重要性や、自然界の法則について教育してきたことが、自称霊能者のたった一言でひっくり返ってしまうのは実に恐ろしいことです」（菊池、

1997) との警鐘はけっして仮心の心配とはいきれないであろう。また 13 位の「空飛ぶ円盤は実在する」を肯定している 58% の大学生に対してはいかなる契機、プロセスでそう信じるようになったのかを確かめることも今後必要な調査となってくる。

10 位から 21 位までを 1 つの群とみれば、最終グループは 22 位以下の比較的容認率の低いグループである。ここに含まれる 22 位「不幸に先祖の霊が関係」の肯定率は 34.3%, 25 位の「死後残る魂エネルギー」は 24.6%, 26 位の「霊の実在は証明された」は 24.6% であるが、さきの 12 位の「心霊現象は実際にある」では 60.7% という高い肯定率であった。こうした結果から霊や心霊現象は証明や具体例があまりなく漠然としていても、存在するにちがいないと捉えられているようである。

30 位「私の神秘的な体験」と 31 位「私には潜在能力がある」の 2 項目は、容認率 0.5 程度、20% 台の肯定率ながら、自分自身の直接的な体験や意識として超常現象を信じる強力な根拠になると考えられる。33 位「空中浮遊を行える者」についての結果は、肯定 17.4%, 疑問 11.6%, 否定 71.0% であった。これは新興宗教集団の重大な事件で問題とされた象徴的な事柄であり、多くの否定的見解と実態解説がなされたにもかかわらず、約 3 割の大学生はこれを否定しきっていない。菊池 (1997) は、教育現場の教員にも超常的な不思議現象に肯定的考えをもつ者もいて、それが流行したり、それを盲信したりすることがもたらす深刻な問題に対して認識が不足しているのではないかとこの意見を述べている。ネッシーについても、スプーン曲げについてもいわずトリックが解明されたが、20~30% の学生は肯定している。客観的な証拠を呈示されても誤った信念を変更・訂正しえないのであれば、妄想的傾向とさえいえよう。

あらゆる超常現象をむやみに否定する態度はけっして好ましいとは思われないが、逆に盲目的に信じ込んでしまう態度も多大な危険性を孕むことになるであろう。重要なことは、超常現象をはじめ不可解、曖昧な現象に対して、無視や逃避することなく、検証・吟味しようとする態度で臨むことであり、結論が得られない場合には早急に白か黒かとの判断を下さずに、結論を保留できる耐性を身につけることであろう。しかしながら、疑いのない正解ばかりを教えられ、求め続けてきた現代の大学生にとって、このことは難問なのかもしれない。

## Study II 大学生の超常現象志向についての因子分析

### I. 目的

超常現象に対する大学生の反応を因子分析することにより、大学生からみた多様な超常現象にどのような因子が関与するか調べることを目的とする。

### II. 方法

超常現象に関する項目は、さきの研究で用いた 34 項目から「現代人の信仰大切」や「深海や密林に未知生物」など超常現象とは直接関係しないであろう項目を除外した。除外した項目は、上記 2 項目のほか、項目 14、29、30、32、33 の計 7 項目である。

対象は大阪府下の国立大学1年生男子15名、女子47名、年齢は全員18歳である。肯定回答を3、疑問を2、否定回答を1と得点化して、27項目について汎用統計パッケージSAS (Statistical Analysis System)を用いて因子分析を行った。

Table 2 バリマクス回転後の因子負荷量

	因子 I	因子 II	共通性
項目 1	-0.257	0.565	0.385
項目 2	-0.250	0.614	0.439
項目 4	0.468	0.011	0.219
項目 5	0.023	0.222	0.050
項目 6	0.530	0.419	0.457
項目 7	0.335	0.285	0.194
項目 8	0.456	0.048	0.211
項目 9	0.109	0.499	0.261
項目 11	0.562	0.199	0.356
項目 12	0.556	0.052	0.312
項目 13	-0.083	0.435	0.196
項目 15	0.038	0.551	0.305
項目 16	0.499	0.142	0.269
項目 17	0.193	0.448	0.238
項目 18	0.328	-0.072	0.113
項目 19	0.268	0.525	0.348
項目 20	0.645	0.144	0.437
項目 21	0.478	0.242	0.287
項目 22	0.711	0.213	0.551
項目 23	0.417	-0.104	0.185
項目 24	0.213	0.565	0.365
項目 25	0.088	0.378	0.151
項目 26	0.551	-0.131	0.321
項目 27	0.696	0.124	0.500
項目 28	-0.046	0.286	0.084
項目 31	0.439	-0.071	0.198
項目 34	0.320	0.530	0.383
説明分散	4.525	3.288	7.814



Table 3 2 因子の項目内容

	因子 I	因子 II
皮膚上から病気を治療	0.711	0.213
心霊現象は実際にある	0.696	0.124
透視術を使える人間	0.645	0.144
偶然でない一致出来事	0.562	0.199
「スプーン曲げ」能力	0.556	0.052
予言者が未来を当てた	0.551	-0.131
本物の超能力もある	0.530	0.419
空飛ぶ円盤は実在する	0.499	0.142
空中浮遊を行える者	0.478	0.242
勝負の最後は精神力に	0.468	0.011
霊の実在は証明された	0.456	0.048
私には潜在能力がある	-0.250	0.614
祈りは天候にも影響	0.213	0.565
私の予想や予感当たる	-0.257	0.565
死の脅威に何倍もの力	0.038	0.551
異次元空間は実在する	0.320	0.530
死後残る魂エネルギー	0.268	0.525
サイコロに精神集中	0.109	0.499

### III. 結果および考察

共通性の初期値を 1 とし、主成分分析により因子を抽出した。結果、累積説明率を 50% あたりまでとすると、5 因子までで 48% となる。しかしその場合、因子負荷量の基準を | 0.45 | と設定しても因子 II に 3 項目、因子 III には 2 項目、因子 IV には 0 項目、因子 V には 1 項目となり、きわめて少数の項目しか含まれない。なるべく多くの項目を含む因子を抽出するため、2 因子解としたが、そのため累積説明率は 28.94% にしかなかった。バリマクス回転後の因子負荷量を Table 2 に示す。Table 3 は 2 因子それぞれの因子負荷量の大きい順にまとめたものである。

まず因子 I に含まれる 11 項目をみると、超能力に関係する内容が中核となっているようである。つまり、皮膚上からの治療、透視術、スプーン曲げ、予言者、空中浮遊、偶然でない一致などのいわば典型的な超能力現象が集まっており、「本物の超能力もある」も入っている。また「心霊現象は実際にある」「霊の実在は証明された」など心霊現象を肯定する項目も属している。大槻 (1993) は超常現象を 2 つに大別し、1 つは誘導型超常現象 (超能力者、霊能力者による) で、1 つは自発的超常現象 (自然に起こる) であり、空飛ぶ円盤はこれに該当する。因子 I はまさに超常現象と認められる項目によって構成されている。よって因子 I を「顕在的超常現象」の因子としたい。

因子Ⅰが大学生一般の能力とはかけ離れた次元の特別な現象や能力を表していたのに対し、因子Ⅱは個人との関わりの強い、個人を取り巻くような内容の項目が中心になっている。例えば「私には潜在能力がある」や「私の予想や予感当たる」といった項目は自分自身について述べられている。また人間の精神が天候やサイコロに物理的影響を及ぼすとか、死の脅威に直面して何倍もの力を発揮するなどの項目は、特殊な人の特別な能力というよりも、自分をも含めた一般の人々の日常的レベルでの出来事として捉えられている。そしてそうした人々の住む世界は「異次元空間は実在する」世界であり、「死後残る魂エネルギー」の世界であるが、しかし日常自分たちが住む世界なのである。

因子Ⅱは、因子Ⅰの顕著な超常現象とは対称的に、自分や自分の身边、周囲に潜む目立たないような非常に希薄な超常現象とみることができる。そこで因子Ⅱを「潜在的超常現象」の因子と命名したい。

大学生の超常現象のとらえ方をこうした観点から考えると、自分の住む世界は不思議や神秘が根底に、潜在的に、普遍的に満ちていて、ときおりそれらの微細な表れに遭遇したり体験したりするが、それは異常な世界でなく日常の世界である。そして世の中にはそうした不思議な能力を想像を絶するほど強く持つ人々が存在し、特に著しく目立って表れる現象もある。ただしそれらの能力や現象は自分たちとは別次元の、真似の出来ないものであるという二重構造をもつものと推察される。

### Study III 大学生の超常現象志向とエゴグラムにおける自我状態との関連

#### I. 目的

超常現象を信じやすい人はどんな性格かについて、菊池（1997）によってまとめられたこれまでの研究によると、権威主義的人格で自我の力の弱い個人は、個人の統制を離れた外部の力としての権威や超自然力を頼りにする結果、超常現象を無批判に信じやすい。また社会的に内向的な人は超能力、神秘現象を信じ、外向的な人は占い類を信じやすいことが報告されている。ここではエゴグラムの5つの自我状態との関連からアプローチを試みる。

#### II. 方法

対象は大阪府下の4年生私立大学の1年生男子67名である。上記Ⅰ、Ⅱの研究で使用した34項目からなる超常現象質問紙と、TEG（東大式エゴグラム）をそれぞれ講義時間中に集団で施行した。

Table 4 超常現象の容認とエゴグラム（5つの自我状態）との関連

		Critical Parent		Nurturing Parent		Adult		Free Child		Adapted Child	
		high	low	high	low	high	low	high	low	high	low
YES回答	多	17	19	24	12	20	16	22	14	20	16
	少	13	18	12	19	17	14	13	18	13	18
		$\chi^2=0.188$		$\chi^2=5.237^*$		$\chi^2=0.003$		$\chi^2=2.455$		$\chi^2=1.236$	
		high	low	high	low	high	low	high	low	high	low
NO回答	多	15	21	16	20	17	19	14	22	15	21
	少	15	16	20	11	20	11	21	10	18	13
		$\chi^2=0.304$		$\chi^2=2.699$		$\chi^2=2.015$		$\chi^2=5.558^*$		$\chi^2=1.792$	
		high	low	high	low	high	low	high	low	high	low
超常現象 容認スコア	多	15	18	22	11	19	14	22	11	19	14
	少	15	19	14	20	18	16	13	21	14	20
		$\chi^2=0.012$		$\chi^2=4.376^*$		$\chi^2=0.145$		$\chi^2=5.426^*$		$\chi^2=1.802$	

\* p. <05

### III. 結果と考察

超常現象質問紙の肯定回答、否定回答それぞれの回答数をほぼ中央値で2群に分割した。容認スコアについても同様に分割した。エゴグラムの5つの自我状態についても、得点の高低によりhigh群、low群に分けて、Table 4に示したように2×2に分割された各マスに該当する人数を求めた。

$\chi^2$ 検定を行ったところ、有意差が認められたのは、超常現象肯定とNP（Nurturing Parent）、超常現象否定とFC（Free Child）、それに容認スコアとNPおよびFCの4つについてである。

まず、NPと超常現象肯定との関連から考察する。NPは養育的・母親的な親の自我状態であり、他者に対して受容的、保護的、同情的で、相手への思いやりが強いとされる。思いやりには、相手が眼前にいらなくても、相手のことを気にかけて心配したり、幸運を願ったり祈ったりする心情も含まれよう。直接的な思いやり行動だけでなく、NPの高い人は精神的にも相手に働きかけており、目に見えない自分の気持ちも相手に通じて、よい影響を与えるとの信念を持ちやすいと思われる。こうした精神的影響力を信じる傾向が、超常現象を信じるものと結びついたものと解釈される。

つぎにFCは、親・社会の統制的な影響を受けていない、快を求め天真爛漫にふるまう自由奔放な子どもの自我状態である。直観的な感覚や創造的特性を豊かに持っているとされる。何事も感覚的に処理し感情的判断をしやすいFCは、慎重に吟味、批判する傾向が少ないため、現実性

の曖昧な超常現象であってもそれらを否定しなかったと考えられる。容認スコアとNP, FCとにみられた有意な関係はさきの解釈と一貫しており、それらを支持、確認するものである。

なお有意差の認められなかったCP (Critical Parent)、A (Adult)、AC (Adapted Child) についてもあわせて検討を加えたい。CPは批判的・父親的な親の自我状態とされ、超常現象に拒絶的な態度を示すことも予想されたが、関連はまったく認められなかった。CPの厳しさは社会秩序の維持や倫理・道徳などの側面に限定された厳格さであって、超常現象が法や道徳に反しない限りは、その容認や否認とは無関係のようである。このことは保守的で非常に真面目な人であるからといって超常現象を信じないわけではないことも意味している。

Aは冷静に事実に基づいて物事を判断しようとする大人の自我状態とされている。超常現象の容認・否認とは有意な関係が認められなかったことは、超常現象に対する判断は日常生活上の、あるいは学問上の判断のように通例的、論理的に行われるのではなく、それらとは別の領域の問題として、あるいはまた感情的な問題として判断されやすいのではないかということを示唆している。この結果からすれば、いわゆる科学者であるからといって超常現象に否定的であるとは限らないといえる。

ACは周囲の期待や命令に過剰ぎみに反応して、自分の主体性を抑えて欲求不満を生じやすいという順応した子どもの自我状態とされている。松井ら(1994)が高校生を対象とした調査では、学校によく適応している子ほど神秘現象を疑うことなく素直に信じるとの結果が得られている。本研究とは対象の年齢や扱った現象の内容も異なっているため単純に比較はできない。ACの高い群のほうが肯定的な傾向にあるようにみられるが、有意差には至らず断定的な結果ではない。むしろ、ACの高い人は周囲の期待や社会的望ましさに従って「よい子」になろうとするために、超常現象を親や教師の認めない現象として否定するほうが望ましいという態度をとることも予想される。超常現象とパーソナリティとの関係の調査はその発達・形成段階からの調査が今後重要になるであろう。

引用・参考文献

- Gilovich, T. 守 一雄、守 秀子訳. 1994. 人間この信じやすきもの. 新曜社.
- 濱野恵一. 1996. 脳とテレパシー. 河出書房新社.
- 平川陽一. 1996. 超常ファイル 世界の怪奇と謎. 廣済堂出版.
- 平野勝巳. 1996. 「未知科学」の扉をひらく.
- 磯崎三喜年編. 1996. マインド・ファイル. ナカニシヤ出版.
- 笠原敏雄. 1994. 超心理学研究. おうふう.
- 金児暁嗣. 1995. 若者と宗教. 高木 修編. 社会心理学への招待. 有斐閣.
- 菊池 聡. 1997. 不思議現象なぜ信じるのか. 北大路書房.
- 小向正司. 1991. 超能力. 学習研究社.
- 松井 豊他. 1994. 高校生が神秘現象を信じる理由. 日本教育心理学会第36回総会発表論文集.
- 宮城音弥. 1997. 精神世界の謎に会おう本. 青春出版社.
- 大槻義彦. 1997. 「神秘と超能力」の嘘. 講談社.
- 末松弘行. 1989. エゴグラム・パターン. 金子書房.
- 高木重朗. 1996. トリックの心理学. 講談社.
- 市川伸一他. 1993. S A S によるデータ解析入門 (第2版). 東京大学出版会.
- 田中 敏. 1996. 実践心理データ解析. 新曜社.
- Yvonne Castellan. 田中義廣訳. 1996. 超心理学. 白水社.
- Zechmeister, E.B., Johnson, J.E. 宮元博章他訳. 1996. クリティカル・シンキング入門篇. 北大路書房.

※本研究における調査にあたって、大阪外国語大学・小松敏彦氏にご協力いただいたことを感謝します。

(1997. 9. 18 受理)